

特集

小児領域における非血管系Interventional Radiology最近の進歩 Recent Advances in Pediatric Non-vascular Interventional Radiology

特集を企画するにあたって

野坂俊介

聖マリアンナ医科大学 放射線医学教室

Shunsuke Nosaka

Department of Radiology, St Marianna University School of Medicine

Interventional Radiologyとは、各種の画像診断検査法を用いて経皮的あるいは経口的に病変部に接近あるいは到達し、診断を目的とした組織の採取や病変に対する治療を行うという手技の総称で、大きく血管系および非血管系に分けることができます。最近ではInterventional Radiologyは、Minimally Invasive Therapyのひとつとして成人領域においては、第一選択の治療法となっている疾患も多くあります。一方、我が国においては小児領域のInterventional Radiologyは欧米に比較してまとまった報告が無いのが現状です。

そこで今回の特集では、小児領域の非血管系Interventional Radiologyに的を絞り、気道系のステント、リンパ管腫に対する硬化療法、食道バルーン拡張術および経皮的ドレナージ療法を取り上げることになりました。各領域についてそれぞれの適応および実際に手技を行う上で工夫、さらには現時点における問題点について

解説していただくことにしました。いずれの先生方も日常臨床の場で実際に手技を行われている先生方であり、きっと読者の先生方のお役に立つ内容だと思います。さらに、今回は小児領域のInterventionalistとしてすべての領域に精通されているピッツバーグ小児病院放射線科Towbin先生に非血管系Interventional Radiology全般に関するOverviewを担当していただくことができました。このOverviewは、米国では広く普及している経皮的胃瘻造設術をはじめ、osteoid osteomaの経皮的治療など最近新しく導入された領域も含まれており興味深い内容となっています。

ご多忙にもかかわらず執筆していただいた先生方にはこの場をお借りして心より感謝申し上げます。

これを機会に、一人でも多くの会員の方々にご一読いただき、明日からの診療にお役立ていただきたいと思います。